

第21回環境情報科学センター賞 受賞者

学術論文奨励賞

受賞者：横関 隆登 氏（長野大学環境ツーリズム学部）



**対象業績：眼差し理論を踏まえた景観評価実践と地域創り
課題の改善方策に関する一連の研究**

【受賞理由】

本対象論文は、従来の景観評価研究にみられなかった人間の視線の存在という切り口で景観評価論を展開する眼差し理論(Way of Seeing)に基づく研究であるとするものであり、この切り口から、地域創り課題である環境アセスメント、防災計画、観光振興に係る課題の研究実践として、三篇の論文が学術論文奨励賞の対象になったものである。それは、①『沼津千本松原』に描かれた景観の特徴：若山牧水を取り巻く千本松原の眺め方を基にして、②『稲むらの火』と『濱口梧陵手記』の中心人物が見た景観の特徴、③飲食店における地域空間体験の典型的構造に対する観光者の選好構造、などである。

著者は、①の論文において、現在の環境アセスメントの景観評価をめぐる実施主体と住民等の食い違いの根本には、景観評価における改善目標が実施主体の独りよがりな反省に留まる傾向性を指摘し、住民からの眼差しとの整合性の確保の必要性を提起する。また、②の論文では、津波防災教育の教本として読まれている本や資料から、視点場ごとの視対象等、防災計画における人と海との適切な関係性を海が見えるという有り触れた暮らしの描写から導出する。③の論文では、観光者を対象に飲食店選びをする際の選好意識やその構造的な特徴などから消費行動と支払意欲との関係性を明らかにし、観光振興や地域創りへの提言を意図するものである。

また、本研究は景観評価研究における基礎的研究の地道な積み重ねを目指す、眼差し理論の切口からの実地調査研究でもある。我が国の環境影響評価における景観評価をみると、これまで眺望景観を対象とする予測評価が中心であった。そのため、地域の住民の眼差しにおける日常的な景観や歴史的・文化的視点の補填は今後の課題でもある。なお、景観法でも住民の参加の促進に向けての仕組みも形成されつつあり、住民の見る側に立った評価基準や評価尺度の定立も今後は求められよう。この景観評価分野における本研究の今後の実践が現下の課題に新たな地平を切り開くよう期待を込めて学術論文奨励賞を授与するものである。

<対象論文>

- ① 横関隆登（2021）『沼津千本松原』に描かれた景観の特徴：若山牧水を取り巻く千本松原の眺め方を基にして、環境情報科学 50(3)、掲載決定。
- ② 横関隆登・山本清龍・大竹芙実・山田優太・下村彰男（2019）『稲むらの火』と『濱口梧陵手記』の中心人物が見た景観の特徴、環境情報科学 48(2)、92-97。
- ③ 横関隆登・下村彰男・大竹芙実（2018）飲食店における地域空間体験の典型的構造に対する観光者の選好構造 -大分県由布市由布院地区での試行的研究-、観光研究 29(2)、5-16。